

野々雨情 著

あさんたいていよさま

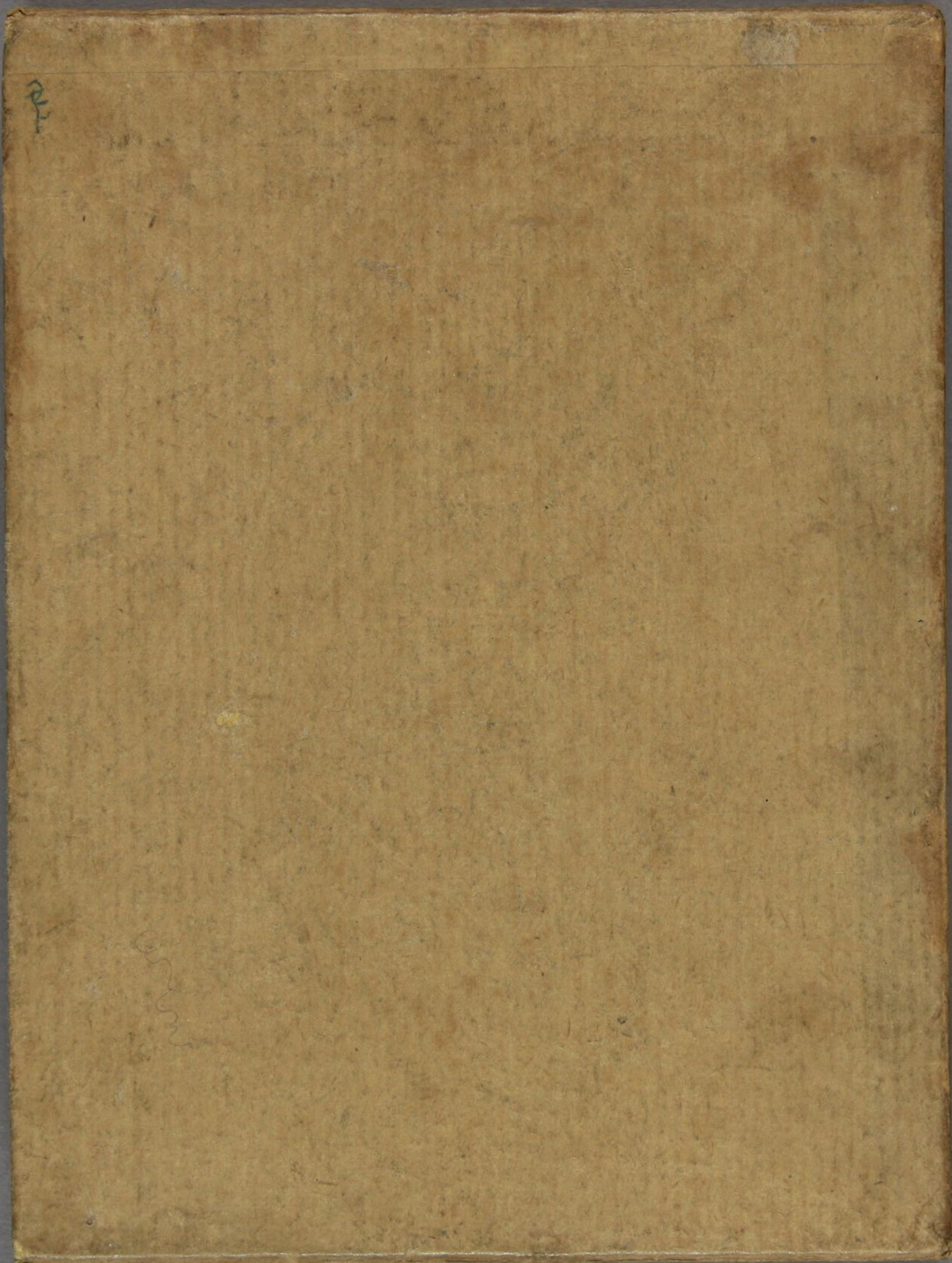
民権白朮



民謡集

おさんだいしよさま

予口雨情著



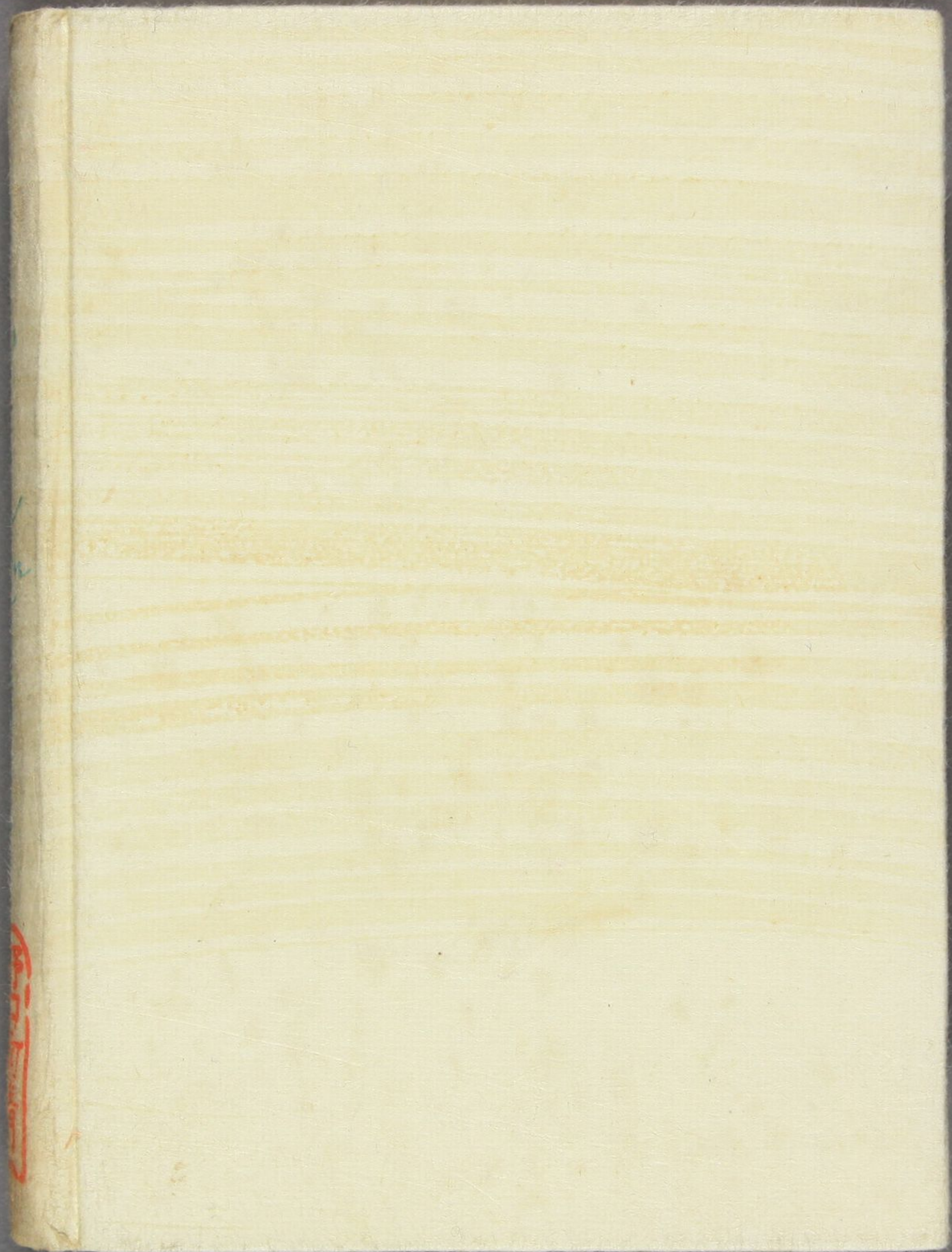
21

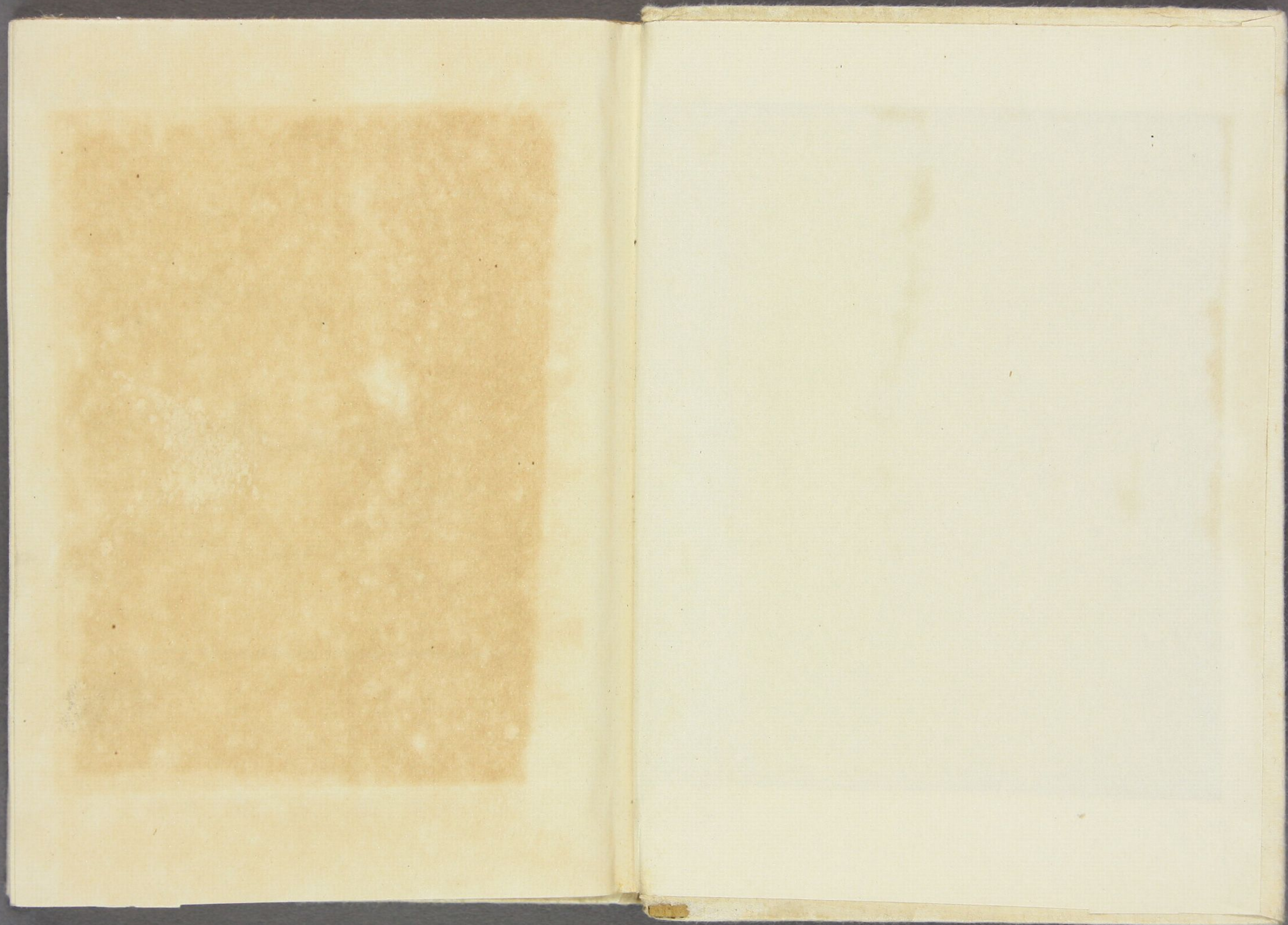


民権集

おさんたじりかきま。

野口雨情





663
J.O.

民 謠 集

お さん だん しい よ さ ま

野 口 雨 情 著



東 京 紅 玉 堂 出 版

中 装
繪 幀

初 山

滋 氏

民謡集『おさんだいしよさま』目次

あの山越えて

あの山越えて……………(三)

酒……………(五)

空は夕焼……………(七)

夢の鳥……………(九)

わたしや女よ……………(一二)

春の月……………(一七)

観音さま……………(二二)

異國情緒……………(二五)

夜明し千鳥……………(二九)

軒端雀……………(三二)

鳴の聲

親心……………(三五)

菜の花踊り……………(三八)

娘と船大工……………(四〇)

戀の巢立ち……………(四九)

鳴の聲……………(五)

岩手小唄……………(五)

笠松機場唄……………(六〇)

さむらひ……………(六四)

小松の蔭……………(六七)

籾 鶯……………(七一)

雉子の雌鳥……………(七四)

梅に鶯……………(七九)

釣 瓶……………(八一)

鴨緑江にて……………(八三)

武藏野にて……………(八五)

笠松小唄……………(八七)

竹が鼻小唄……………(八九)

別府温泉小唄……………(九一)

日田小唄……………(九五)

尾張奥町機場唄

.....(九七)

野雀・雀

野雀・雀

.....(一〇四)

人形さんよ

.....(一〇五)

三千世界

.....(一一〇)

わが涙

.....(一一一)

雀の鳥

.....(一一三)

みなと

.....(一一三)

茨の實

.....(一一七)

因幡夕焼

.....(一二〇)

行々子

.....(一二三)

鯉の瀧登り

.....(一二四)

笑ふ門

.....(一二六)

常世の春……………(二九)

農民歌

農民歌……………(一五)

春の來る日……………(三二)

そらとぶ鳥……………(四一)

横丁生れ……………(四四)

狐見るたび……………(四七)

踵……………(四九)

子 蜂……………(五一)

あの山蔭……………(五三)

もと米磨ぎの唄……………(五五)

西瓜の番……………(六〇)

畑のとんぼ……………(六二)

お百姓生れ……………(一六四)

麥の芽……………(一六六)

わしが鳥なら……………(一六八)

茶ツ葉

茶ツ葉……………(一七三)

秩父三峰……………(一七六)

菜の花畑……………(一八〇)

鐘になりたや……………(一八四)

秋風……………(一八八)

津島小唄……………(一九二)

はぐれ鳥……………(一九五)

御山小唄……………(一九六)

秋の月……………(一九九)

高原風……………(106)

古巢わすれて

古巢わすれて……………(111)

この子を寢せて……………(112)

蝙蝠……………(115)

鳥と南瓜……………(117)

ほととぎす……………(133)

豆の花……………(135)

磯原小唄……………(138)

おさんだんさいよま

おさんだいしよさまは、常陸地方の方言、
三臺屋のことなり。

おさんだいしよさま

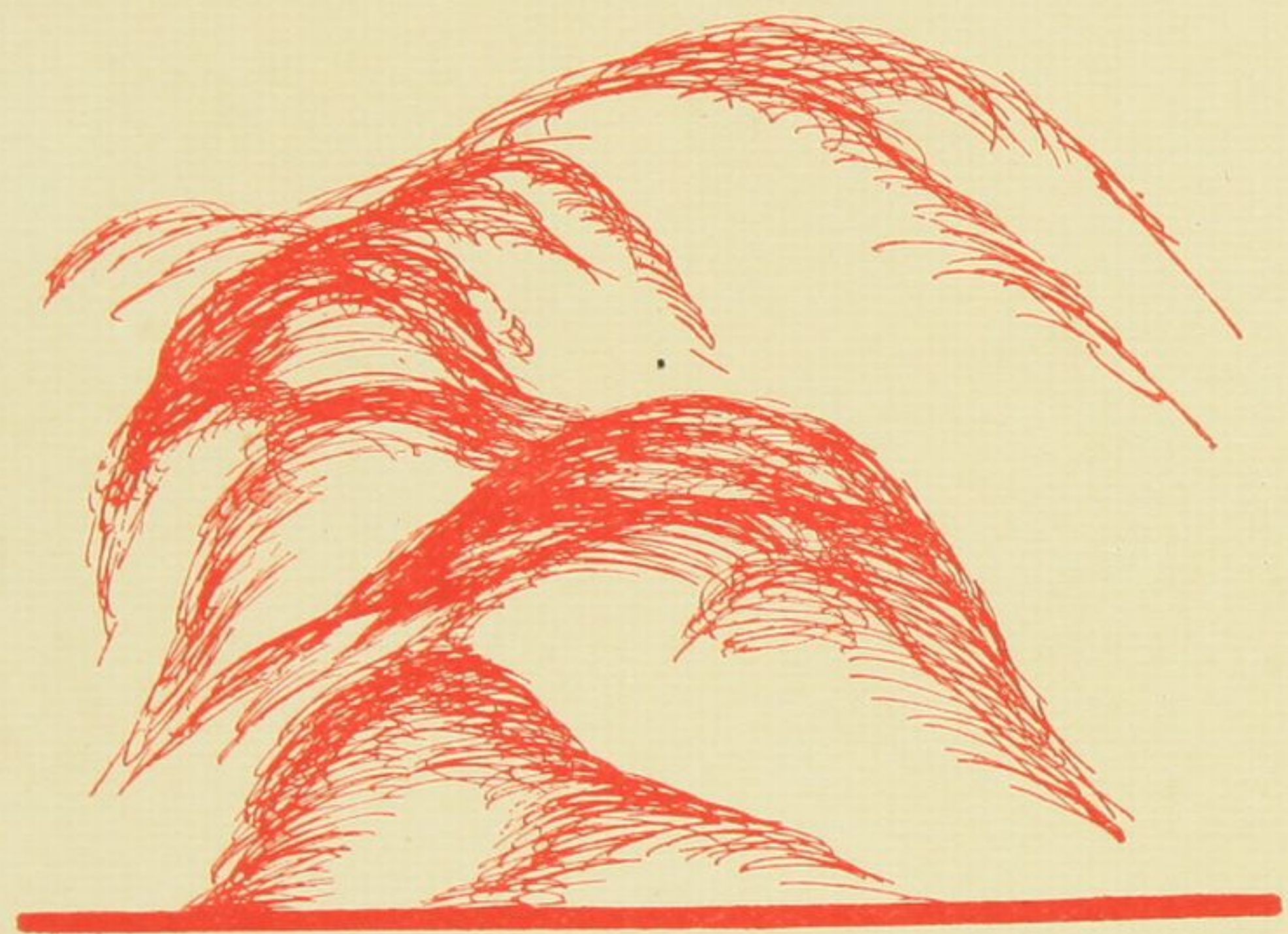
屋根の上やねのうへ

麦搗きや白むぎつの蔭うすかげで

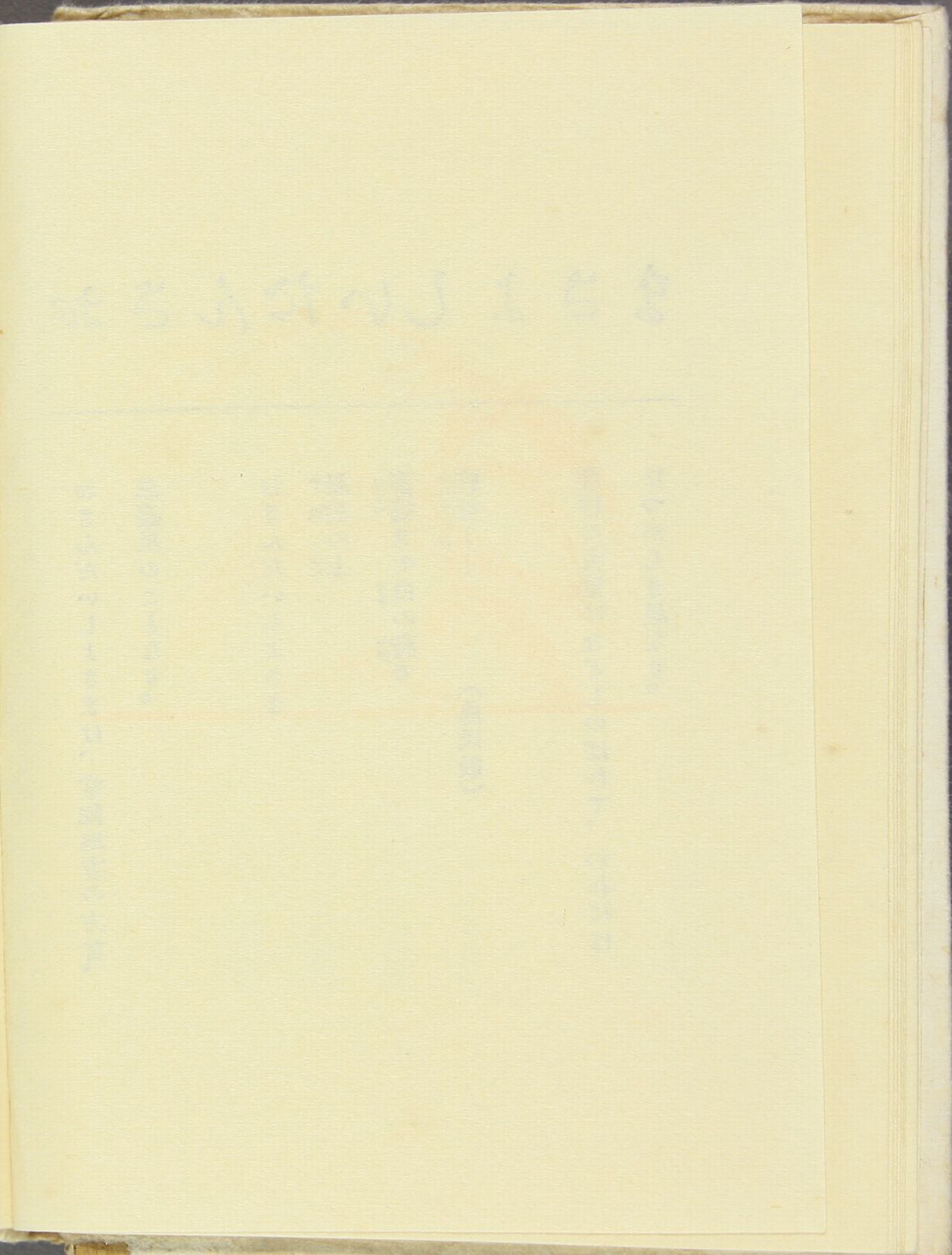
杵枕きねまくら

(農民歌)

農村の夜更けなどしのばれて、われには
なつかしき星なり。



てえ越山のあ



あの山越えて

おれとゆかぬか

山越えてやまこ

あの山越えてやまこ

ゆかないか

4 連れてゆくなら

ゆきもせうが

鬼がゐるから

おらいやだ

酒

酒はよいもの

お酒はアラヨー

酒は(サ)酒は命の(ドンドマンマホイ)

5 若返り 若返り

命若うすにや

お酒で(アラヨー)

酒で(サ)酒で命が(ドンドマンマホイ)

若返る 若返る

空は夕焼

空は夕焼 酒場は遠い

可愛女かほいをんなでも見にゆこか

コリヤ デカ〜レン〜

7 可愛女に逢ひたさで見たさで

8 遠い酒場へ酒飲み

コリヤ デカ〜レン〜

何をくよ〜酒場の酒で

酔ふて戀した身ぢやないか

コリヤ デカ〜レン〜

夢の鳥

わたしや女の

かなしさに

捨てらりや世間も

9 狭くなる

女の念力ねんりき

夢の鳥

夢の鳥ゆゑ

自由な翼つばさ

來るなと言ふても

逢ひにゆく

わたしや女よ

わたしや女よ

可愛かはいの人よ

思ひつめれば

蛇じゃにもなる

戀に生きませう

可愛の人よ

永いこの世に

短や命

どうせこの世は

苦の娑婆よ

14 戀は自由よ

ほんに自由

連れてゆくな

鬼棲む國の

遠い世界の

果^{はて}までも

辛^{つら}さこわさを

可愛の人よ

わたしや思ふて

戀はせぬ

春の月

一

紅^{べにや}屋で娘の言ふことにや

(サノ)言ふことにや

春のお月さま薄^{うす}ぐもり

(ト、サイ〜)薄ぐもり

お顔に薄紅つけたとさ

(サノ)つけたとさ

わたしも薄紅つけよかな

(ト、サイく)つけよかな

二

粉屋^{こなや}で妹の言ふことにや

(サノ)言ふことにや

わたしの姉さん薄化粧

(ト、サイく)薄化粧

お顔がほんのり桜色

(サノ)桜色

わたしも薄化粧^{うすけしよ}しませうかな

(ト、サイく)しませうかな

観音さま

唄

「わたしや淺草の

観音さまで——

詞

「お母さんに話しちや

いけないよ

唄

「しかも灯ひのつく

たそがれ頃に——

詞

「言つてあるいちや

困こまるだよ

唄

「鳩がお屋根で

夕ゆふざれた

唄

「屋根の瓦を

眺めてゐたりや

詞

「観音さんに話しちや

いけないよ

異國情緒

嫁になりたや

聳さまほしや

縁が遠くて

なさけなや

アラテバヨ アラテバヨ

縁が遠けりや

おしやれておいで

人目ひとめ惹ひかなきや

縁が來ぬ

アラテバヨ アラテバヨ

26 人目惹くさに

門かどへ出て見たが

今日けふも空むなしや

日が暮れる

アラテバヨ アラテバヨ

いつそ金きん茶ちやに

髪の毛お染め

異國情緒で

縁もある

アラテバヨ アラテバヨ

27

夜明し千鳥

今夜忍ぶは

戀ではないに(サイ〜)

千鳥ア宵から

チロチロリンと啼きやる

寒や河原の

夜明し千鳥(サイ〜)

わたしや戀路で

ゆくぢやない

30 戀や戀路で

忍んだ頃にや(サイ〜)

わたしや焔の

火も吐いた

軒端雀

軒端で雀の

言ふことにや

窓から手紙を

31 ちよいと投げりや

お父^{とつ}さんも知らない
アララのラ

お母さんは知らない
アララのラ

ちよいと見て袂に
ちよいと入れた

アララのラ
アララのラ

親心

お袖引かれりや

いやだと言へよ

ほいと呼ばれりや

顔かくせ

十四頃なりや

未通おぼこで通る

明けりやにじういち二十一

十四とせう

36 聞いて下さる

お母さんよ

燃ゆる心は

かくされぬ

菜の花踊り

咲けや菜の花

揉めろや菜の葉　ホイ／＼

お月や片割れ

37
晝^{ひる}出てる　ササ　ホイ／＼

わしと晝出る

片割れお月や ホイく

連れ衆ほしさに

氣が滅めい入る ササ ホイく

連れ衆持たせりや

すちや ちやら ちやらか ホイく

連れ衆眺めて

わしや暮す ササ ホイく

咲けや菜の花

揉めろや菜の葉　ホイ〜

花が揃はにや

葉が揉める　サア　ホイ〜

晝の日に

菜の葉が揉めりや　ホイ〜

お月や焦れて

細枯れる　ササ　ホイ〜

可愛や晝出る

細枯れお月や　ホイ〜

42 連れ衆ほしさに

夢もみる ササ ホイ〜

娘と船大工

娘

橋をかけたや

音頭おんどの瀬戸へ

通かよてゆきたや

43 船大工さんよ

船大工

汐にせかれりや

橋ア流る

娘

橋が流れりや

わたしも流る

小舟ほしいや

船大工さんよ

船大工

舟も櫓がなきや

流される

娘

橋はせかれる

舟ア流される

通て来るなか

船大工さんよ

船大工

命帆いのちほにして

通て来よかよこ

戀の巢立ち

戀の巢立ちか

夕のお星や

觸れりや落ちそにもう出てる

觸れりや落ちそに

もう出てる

女なりやこそ

涙ももろい

戀の甘さにや泣かされる

戀の甘さにや

あこがれる

泣かされる

空はたそがれ

夕のお星や

うぶな心であこがれる

うぶな心で



鳴 の 聲

鳴の聲

晩ほげになつても

お母つかさんが來こない

お母さん來くるか

55
出て見たりや

スイ〜ちけ

鳴の聲

鳴は田で啼く

可愛鳥かあいどり

待つてもお母さんの

来こないときや

せどの田浦で

いつも啼く

岩手小唄

○

岩手片富士かたふじ

あの山蔭で

なじよな心で あねこよ

暮すやら

○

あねこ思へば

あの山蔭の

雪もおぼろに あねこよ

解けぬかや

笠松機場唄

一

言ふた 言ふた 言ふた

お母^{つか}さんが言ふた

美濃の笠松ア

住みよて居よい

同じゆくなら

美濃縞織りに

娘ゆけよと

よいこと言ふた

==

トンカ トンカ トンカ

機場はたばで暮らしや

いつも心が

美濃縞織りに

ゆこかお母お母さん

機場の夢を

昨夜ゆうべ夢みた

トンカ トンカ若い

さむらひ

空の雲さへ

日の暮れにや

風に吹かれて

はぐれがち

風はなさけに

吹くぢやなし

雨もなさけに

降るぢやなし

66 どうせなさけの

風ちやとて

涙まさせる

ことばかり

小松の蔭

雉子きぎ子ア啼くから

出て山見たりや

雉子ア小松の

67 雉子ア小松の

蔭で啼く

山は焼け山

焼け山蔭ぢや

雉子ア棲もとて

棲まりやせぬ

棲むにや棲まれず

小松の蔭へ

姿隠して

姿隠して

雉子ア啼く

雉子ア鳥とびでも

姿を隠かくす

人目ひとめしのんで

いぢらしや

藪 鶯

どこで生れた

藪 鶯 よ

わたしや谷間たにまの

藪 育 ち

谷間出るときや

氷の筏いかだ

山にや斑まじりに

雪も降る

長い旅ゆる

甕やれたわたし

姿見せるも

恥かしや

雉子の雌鳥

雉子きじの雌鳥めんどりや

茅野の中で

子供たづねて

ほろたたく

わが子可愛や

茅野は深や

ほろろ ほろちけ

ほろたたく

西でほろほろ

東でほろろ

76 藤の焼け蔓

見ちやほろろ

わが子可愛や

地べたは廣や

どこが地べたの

果てだやら

一の山越え

二山蔭ふたやまにや

同じ野もありや

原はらもある

雉子の雌鳥や

地ぺたの上を

踏んで啼き啼き

ほろたたく

梅に鶯

梅に鶯

ちらりととまり

ちらりとまつて

言ふことには

竹に雀は

仲よくとまる

梅にわたしは

来てとまる

ホホ ホケキヨ

ホ ホケキヨ

釣瓶

釣瓶つるべたたいたら

雀の鳥は

たまげはらつて

飛んで廻まわつた

82 たまげはらつて

雀の鳥は

釣瓶ちよいと見て

飛んで逃げた

鴨緑江にて

鴨緑江流す筏は

水まかせ

ちやうどわたしの

83 身の上も

84 その日その日の

風まかせ

人の知らない

袖しぼる

武藏野にて

雲雀ひばりの唄うたよ

なつかし唄うたよ

おいらももとは

85 田舎わなかの生れうま

畑はたけの中なかで

麦むぎ笛ふえ吹ふいた

笠松小唄

木會おんたけの御嶽おんたけから

流ながれる水みづも

しばし 笠松かさまつの

岸かたによどむ

88 水の流れさへも

笠松ア戀し

わかれ惜んで

しばし よども

(註。笠松町は岐阜縣木曾川の岸にあり)

竹が鼻小唄

たんく竹が鼻たけはな

よいくよいとこ

飛んでゆきたや

89 翼欲よねほしや

飛ぶに飛ばれぬ

片袖しぼる

せめて雀の

翼はね欲しや

(註。竹が鼻町は美濃國の小都會なり)

別府温泉小唄

海地獄

海の中かと

思ふてゐたりや

別府海地獄べつぽううみぢごく

山の中

鶴見地獄

おさへきれない

わたしの胸は

ちやうど鶴見つらみの

活地獄いきぢごく

八幡地獄

わたしや別府の

八幡地獄はちまんぢごく

ぶつりくと

日を暮らす

血の池地獄

とてもかなしや

血の池地獄

とてもこの世と

思はれぬ

坊主地獄

因果地獄を

見たけりやおいで

因果地獄は

坊主^{ぼうち}地獄

日田小唄

○

茶の芽^や仲びるし

鮎^あ瀬に

のぼる

茶摘み女^{ぢまこ}も

もう來^こやう

○

茶摘みアしまへば

鮎ア瀬を

くだる

早瀬眺めて

袖しぼる

(註。大分縣日田郡は野生茶の産地なり)

尾張奥町機場唄

一

おいで おいで おいで

この町へ^{おきし}おいで

98

來たら序ついでに

機織つておいで

住んで住みよい

暮してゐよい

尾張奥町は

機場でござる

二

啼いた 啼いた 啼いた

また来て啼いた

軒端のぞ覗きに

99

ちよいと來た雀



雀 · 雀 野

今夜來よとて

逢はれるものか

尾張奥町は

月夜でござる

野
雀
・
雀

野雀・雀

旅の(チンチン)雀か

野雀 雀

夜さへ(チンチン)明ければ

啼く雀

山で(チンチン)寝ました

枯れ木の下に(ネ)

磯で(チンチン)寝ました

小石の上に(ネ)

今は(チンチン)宿なし

野雀 雀

空を(チンチン)眺めて

日を送る

人形さん

七つ八つまで

赤い下駄はいた

人形さんよ

赤い下駄見りや

思ひ出す

赤い鼻緒の

下駄はく頃にや

人形さんよ

わたしやお母さんと

ねんねした

いつの間まにやら

物耻ものづかかしい

人形さんよ

淡あざいあはれの

夢ゆめもみる

三千世界

廣いこの世は

三千世界

親のない子は

皆おいで

わが涙

砂の數ほど

かぞへて見たが

かぞへきれない

わが涙

雀の鳥

みんなおなりよ

雀の鳥に

雀ア家藏いへくら

建てやせぬ

みなと

山が晴れば

母かみやんよ母やんよ

あれサ港に

風が吹く

風はわかれの

母やんよ

あれサわたしの

袖に吹く

山が曇れば

父^{とと}やんよ 父やんよ

あれサ港に

雨が降る

雨は涙の

父ととやんよ

あれサわたしの

袖に降る

茨の實

おお寒む

寒むや

赤い茨の

實が落ちる

霜は山にも
降つたやら

山の木の實も
落ちたやら
おお寒む
寒むや

因幡夕焼

因幡夕やけ

どの山見ても

山にや

木のない

山ばかり

山にや

木はない

あの山あたりや

備前備後か

岡山か

行々子

葦よしの葉蔭でカッサカサと
 行々子よしきりア騒ぐ

石を投げたら日の暮れ頃だに
 飛んで逃げた

葦は夕風ぐカッサカサと
 行々子ア歸れ

飛んで逃げよと日の暮れ頃だにヨ
 石ア投げぬ

鯉の瀧登り

鯉の瀧登り

鯉の瀧登りヤ

水をたよりに

瀧をのぼる

瀧にや瀧の水

樋の水はホ

樋ひたよりに

流れてる

笑ふ門

笑ふ門には

福來るたとひ

笑て暮らそよ

皆さんよ

笑ろて暮せば

家内中平和

愉快 愉快で

暮らされる

愉快 愉快で

家内中暮らしや

いつもおだやか穩

波ア立たぬ

常世の春

空は花ぐもり

菜の花日和

紅あかい花咲きや

皆戀しがる

花は常世の
春に咲く

少女若かれ
世は長閑なれ

紅い花から

こぼれて落ちる

花の雫は

汲んでも盡きぬ



歌 民 農

農民歌

一 ひとくわ 鋤打ちな

サツクリコと打ちな

二 ふたくわ 鋤打ちな

ウントサと打ちな

この畑ぼたがや耕しや

一ひとやすみ

夏の煙けむりの

一ひとやすみ

春の來る日

春はるの來る日ひにや

こころの底そこに

娘むすめさんたちよ

草くさがちよつぴり

遠つひにやちらほら

娘むすめさんだちよ

そのままおけば

茂しげるその葉はを

葉はが茂しげる

萌もやせぬか

萌もえた草くさだと

摘つまずにおけば

娘むすめさんだちよ

臆おそて葉はがで出でて

花も咲く

そらごぶ鳥

空飛ぶ鳥なら

行く先やどうでも

青空まかせに

飛ばなきやならない

帆かけた船なら

行く先やどうでも

吹く風まかせに

走らにやならない

引かれた袖なら

行く先やどうでも

行く先まかせに

行かなきやならない

流れる水なら

行く先やどうでも

瀬と淵まかせに

流れにやならない

横丁生れ

お乳母うはひがさ日傘ひがさの

娘さん達よ

わたしや下街したまち

横丁の生れ

蝶よ花よぢや

育そだちやせぬ

産うみの親より

育ての親ぢや

親も横丁の

角かどうま生れ

わたしや皆さん

氣も荒い

狐見るたび

狐見るたび

おら考へる(ドツコイ)

可愛女かほいをんなに

なぜ化はけぬ

化けてくれれば

話はなしもあるが(ドッコイ)

化ほけにや狐と

話はなされぬ

踵

踵かかとたたいたりや

踵かかと見て泣いた

踵見ながら

策さるな投げた

箎さるは空から箎さる

ころげてまはりや

踵かかと忘れて

箎さる見みてる

子
蜂

梨はなの番ばんすりや

蜂の子が憎や

子蜂アな

152

子蜂ア飛んで来て
梨^{なし}刺した

あの山蔭

山は 霜枯れ

月や細枯れる

お月や出てても

あの山蔭にや

153

鬼が棲むだろ

なヨ 母^かや

もと米磨ぎの唄

桶をながめてお米が磨^とげりや

お百姓さんは

田さへながめりや藏^{くら}が建つ

(トコ トコダト磨ぎぬきな)

一桶磨ぐのひとをけとにや十桶との水汲み

夜明けの明星は

まだく〜チラリだ

(トコ トコダト磨ぎぬきな)

この桶あげなきや仕込みがおくれる

仕込みがおくれりや

お暇出いとまだされる

(トコ トコダト磨ぎぬきな)

お暇出いとまだされりや酒藏はくらとおわかれ

そのときや

あの娘こと泣きわかれ

(トコ トコダト磨ぎぬきな)

そのときやそのときおさらばさらばだ

天道てんとさままかせに

足まかせ

(トコ トコダト磨ぎぬきな)

さうなりやこの地ちへ來年らいねん來るやら

當あてさへないから

尙なほさら更さらあの娘こと泣きわかれ

(トコ トコダト磨ぎぬきな)

西瓜の番

西瓜畑さ

おら行かぬ

狐がゐるから

おら行かぬ

ホイホイちけ

西瓜の番

西瓜畑で

寝てたちけ

畑のとんぼ

とんぼ追つかけたら

畑さ逃げた

とんぼよウ

とんぼア畑で

スウイ スイ

お百姓生れ

おらは田舎ゐなかの

お百姓ひやくしやうま生れ

田螺たにしながめて

暮くらしてた

お前まへや東京とうきやうの

お嬢ぢやうさま育そだち

おらと生うまれが

ちがひやさ

麥の芽

麥が芽を吹きや

雁が雁が 歸る

一羽いちう歸れば

また一羽歸る

歸る雁でも

別れは惜む

畑見ながら

啼いて立つ

わしが鳥なら

わしが鳥なら(ヨー)

鳥からすの鳥に(ヤンレサホイ)

啼ないて夜明よあけを(ヨー)

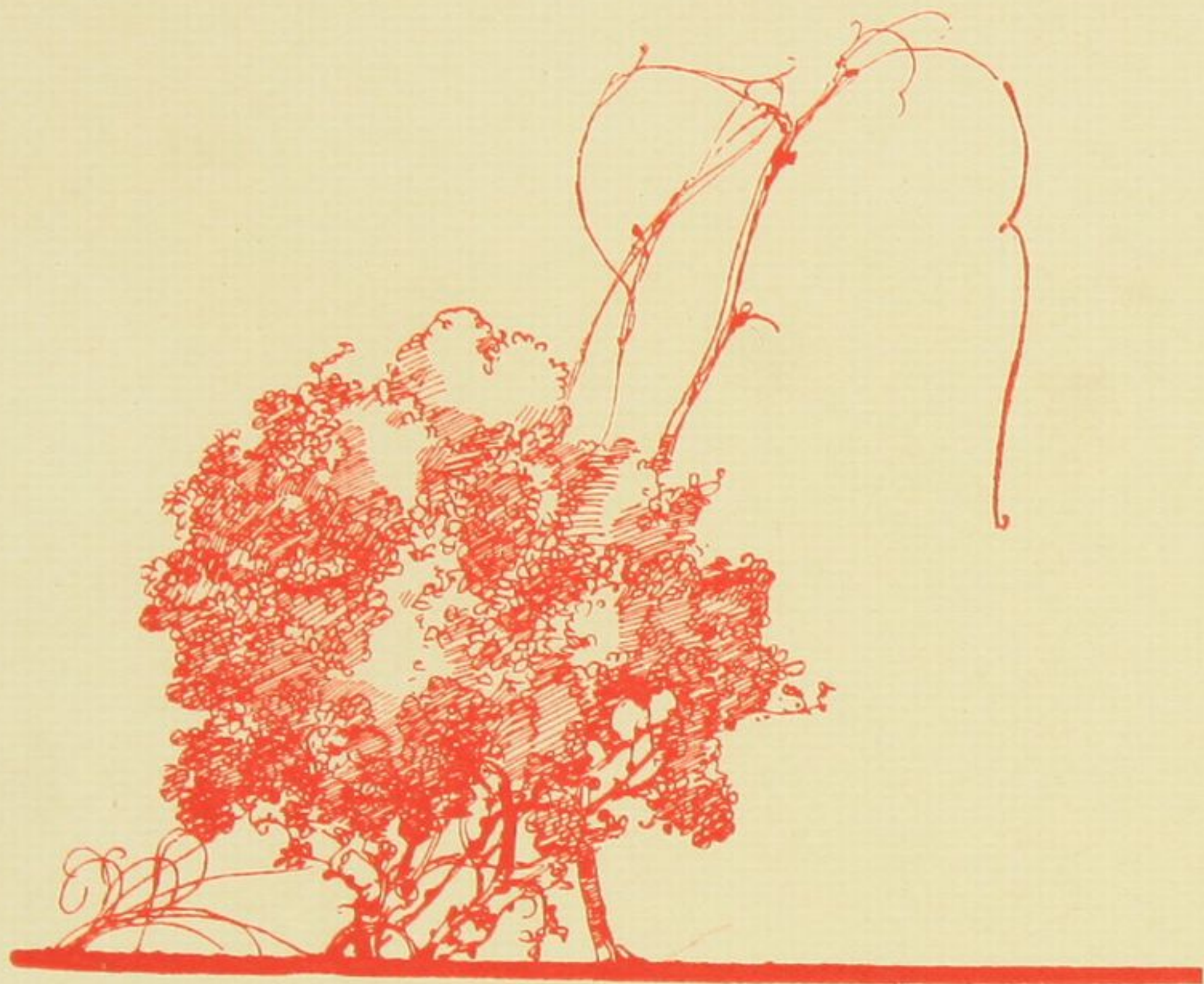
知らせたい(ヤンレサホイ)

啼ないて夜明よあけを(ヨー)

鳥の鳥は(ヤンレサホイ)

騒さわぎまはして(ヨー)

ふれあるく(ヤンレサホイ)



茶 葉

173

雀ア歸るに

かはたれ頃に

一

茶ツ葉

174

小雪ヤちらりと

来て降つた

茶の樹畑の

茶の茶ツ葉に

二

175

雀ア來ちや啼き

來ちや見て啼いた

茶の樹畑の

茶ツ葉の上に

小雪ヤ降つちや解け

降つちや解けた

三

茶の樹畑にや

茶の樹の茶ツ葉

小雪ヤ降るのに

かはたれごろに

雀ア茶ツ葉に

とまつてた

秩父三峰

朝にや朝霧

夕にや

狭霧

秩父三峰

霧の中

霧にまかれりや

三峰さまも

霧にまかれた

ままで

寝る

菜の花畑

畑に菜の花

咲いたとさ

菜の花咲いたら

見てよかな

菜の花畑は

夕ゆふ明あけり

日暮れにやお星も

出るだとさ

お星も出たなら

見てよかな

お星もちらく

ゆふあか
夕明り

鐘になりたや

鐘になりたや

チャン チヤカ チヤンの鐘に

叩きやチャン チヤカ チヤンと

鳴る鐘に

チャン チヤカ チヤンとナ

鐘は氣樂ぢや

チヤン チヤカ チヤンのチヤンと

叩きや チヤン チヤカ チヤンの

チヤンと鳴る

チヤン チヤカ チヤンとナ

どうせなるなら

チヤン チヤカ チヤンの鐘に

叩きや チヤン チヤカ チヤンと

鳴る鐘に

チヤン チヤカ チヤンとナ

鐘になりたや

チヤン チヤカ チヤンのチヤンと

丸く角かどなく

暮したや

チヤン チヤカ チヤンとナ

秋風

夕となれば

風は秋かや

そよ／＼と

野末の草に

そよくと

風は吹く

野末の風も

今は秋なれや

野に鳴く虫は

秋の虫かや

ほそくと

草端の蔭に

ほそくと

虫は鳴く

190

草端の虫も

今は秋なれや

津島小唄

津島つしま 津島つしまと

日の暮れ

頃はよ

風も津島へ

191

吹きたがる

風に吹かれりや

草木でも

靡くに

袖に吹く風

吹いて来る

(註。愛知縣津島町は昔より美女多しと傳へらる)

はぐれ鳥

鳥ア啼くから

出て見りやあない

お母さんよ

わたしや鳥に

だまされた

オヤお母さんよ

はぐれ鳥だ

だました鳥

お母さんよ

鳥ア啼いても

もう出ない

オヤお母さんよ

御山小唄

一

霧にまかれりや

御山おやまが曇る

シヤン／＼シヤン

御山雨降りや

つまさきやすなる

二

御山曇れば

馬よ

雨となる

シヤンノシヤン

ナリヤころげる

馬よ

谷底へ

三

谷は深谷

底なし地獄

シヤンノシヤン

落ちりや地獄だ

馬よ

氣をつけな

四

せくな 急ぐな

頂上にや遠い

シヤン／＼シヤン

せかず急がず

馬よ

早よ歩け

五

風が強うなりや

御山おやまは晴れる

シヤン／＼シヤン

晴れりや青空

馬よ

日は風なぎる

秋の月

お月さま見てたりや

とほしくなつて来た

お月つきさま出でても

秋の月つき

薄すすきにゆられて

夢をみてる

霧たちのほれよ

山の端はに

お月さまみた夢

青い夢

片袖かたそでぬらした

夢をみてる

高原風

(高原風は日光の連山一帯より吹きおろす山風)

寒い筈だよ

たかはらおろし
高原風ヤ

馬の耳まで

凍^えてかへる

馬よ 寒かる

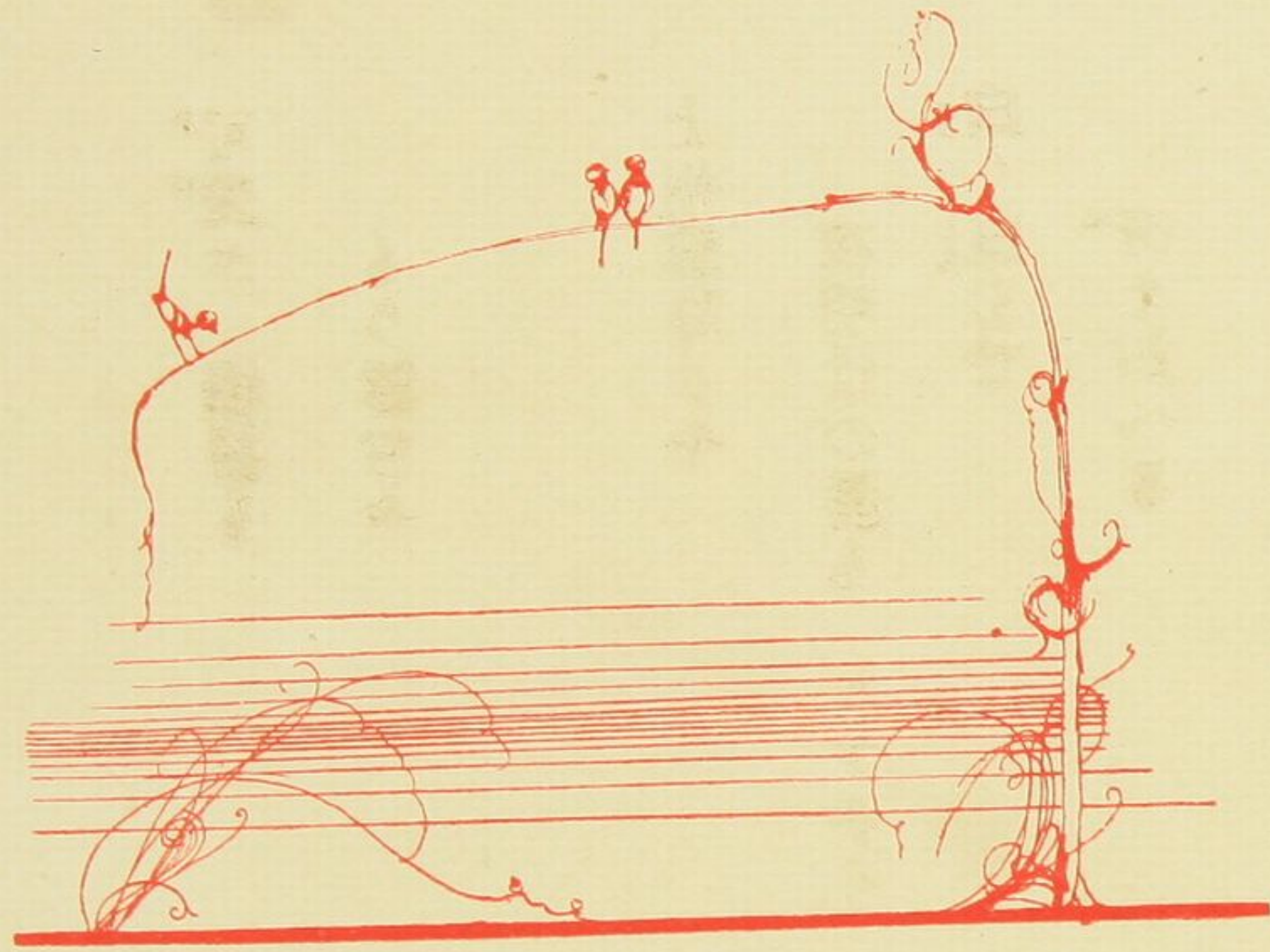
高原風ヤ ササホイ

小雪交りで

吹きおろす

小雪ヤチラ〜

上州は雪ぢや



てれすわ巢古

可愛^かヤ 機場も

もう雪ぢや

上州雪降りや

夜明けの星も ササホイ

白く白^{しろ}んで

冴^さえかへる

古巢わすれて

古巢わすれて

小鳥の

子等は

どこにゐるやら

211

歸らない

この子を寝せて

鳩ぼつぼ啼くから

歸らぬか

歸ります 歸ります

あの山越えて

鳩ぼつぼ啼くのに

歸らぬか

歸ります 歸ります

あの川越えて

鳩ぼつば啼いても

歸らぬか

歸ります 歸ります

この子を寝せて

蝙蝠

草履投げたら

蚊喰ひの鳥は

蚊かと思てか

だまされてるに

217

烏ア南瓜を

(トドンガドン)

烏が來てる

南瓜畑に

烏と南瓜

216

草履カサ慕もとふて

飛びさかる

ながめてる

鳥見てたりや

鳥も見てる

(ドドンガドン)

鳥ア柿の木に

飛んでいつた

南瓜叩いて

敷^{かき}へてみたりや

(ドドンガドン)

鳥アちよろりと

あつち向いた

見て啼いた

南瓜欲しけりや

こつち來な鳥

(ドドンガドン)

鳥ア黙つて

ほととぎす

じやがたらいも
馬鈴薯の

花咲く頃にや

ほととぎすア啼く

聞きやしやんせ

海の上越えて

来て啼く聲か

山の上越えて

来て啼く聲か

224

ほととぎすア啼く
聞きやしやんせ

豆の花

裏へ出て來ちや

畑を見てる

225

盆ぼんが來くるから
姉あねさん達たちよ

東ひがしは海よ
末すえの松並まつなみ

—

磯原小唄

豆の花でも
咲いたのか

228

吹いてくれるな

汐風よ

風に吹かれりや

松の葉さへも(オヤ)

こぼれ松葉に

なつて落ちる

二

お色黒いは

磯原生れ

229

風に吹かれた

まさよしいだんさお 集議民



大正十五年六月五日印刷
大正十五年六月十日出版

定價九十五錢

著者 野口 雨情

發行者 前田 隆一

印刷者 友文社印刷所

東京市神田區三崎町三丁目五十六番地

日本橋區檜物町九番地

發行所 紅玉堂書店

振替東京三三一六番

汐風に

啼いてくれるな

渚の千鳥(オヤ)

末の松並ア

風ざらし

(註。磯原町は茨城縣海岸の勝地である)

紅玉堂出版文藝書目

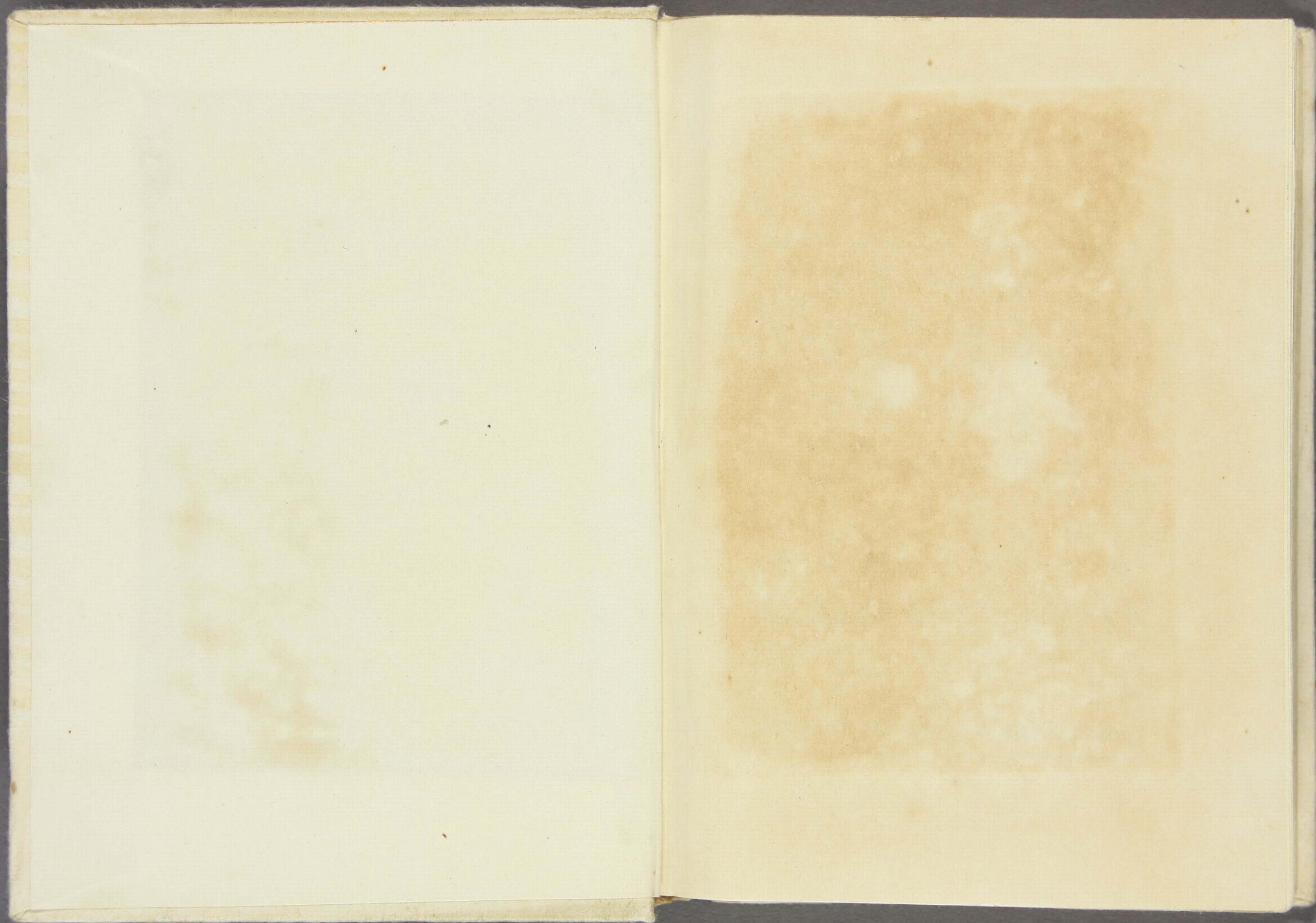
石井 啄木著	啄木歌集	定價一圓 送費六錢
國木田獨步著	獨步詩集	定價一圓十錢 送費六錢
半田 良平著	短歌新考	定價二圓三十錢 送費十錢
松村 英一編	改選現代短歌用語辭典	定價一圓八十錢 送費六錢
鷹野 つぎ著	小説ある道化役	定價二圓五十錢 送費八錢
松村 英一著	歌集やますげ	定價三圓 送費十二錢
花田比露思著	歌についての考察	定價二圓五十錢 送費十二錢

服部 亮英著	スケッチと漫畫自在	定價一圓三十錢 送費六錢
進藤 延著	硬球テニス 軟球智識と競技	定價一圓三十錢 送費八錢
勝田 香月著	詩集さびしき人々へ	定價九十五錢 送費六錢
同	詩集哀別	定價一圓二十錢 送費六錢
松原 至大著	詩集海の愛	定價八十五錢 送費六錢
松村 英一編	現代一万歌集	定價二圓三十錢 送費十二錢
尾山篤二郎著	短歌五十講	定價二圓三十錢 送費十二錢
窪田 空穂著	歌集泉のほとり	定價一圓 送費八錢

勝田 香月著	惱 知る 頃	定價九十五錢 送費六錢
尾山篤二郎著	萬葉集物語	定價一圓八十錢 送費八錢
同	歌はかうして作る	定價一圓廿錢 送費八錢
金子 光晴譯	近代佛蘭西詩集	定價一圓六十錢 送費八錢
小田切浪彦著	歌集しほさる	定價一圓八十錢 送費八錢
勝峰 晋風校	芭蕉一葉集	定價三圓九十錢 送費十二錢
植松 壽樹編	萬葉調短歌集成(一)	定價二圓八十錢 送費十二錢
同	同	同
同	同	同

半田 良平編	蕪村俳句全集	定價五十五錢 送費四錢
同	一茶俳句集	定價五十五錢 送費四錢
今中 楓溪著	歌集あかね	定價二圓二十錢 送費八錢
植松 壽樹著	歌集庭燎	定價二圓三十錢 送費八錢
加藤 介春著	詩集眼と眼	定價二圓 送費八錢
高橋 新吉著	詩集祇園祭り	定價九十五錢 送費八錢
佐藤惣之助著	新民論集 浮れ鴛鴦	定價九十五錢 送費八錢
伊藤 喬信譯	ボオ全詩集	定價九十五錢 送費八錢

尾山篤二郎著	處女歌集	定價一圓八十錢 送費十錢
半田良平著	歌集 野づかさ	定價二圓 送費十錢
土岐善麿著	歌集 緑の斜面	定價二圓五十錢 送費十錢
新島榮治著	詩集 濕地の火	定價一圓三十錢 送費八錢
同	同 隣人	定價一圓五十錢 送費八錢
若目田三郎譯	ロシア詩集 幻の鐘	定價九錢 送費六錢
浦瀬白雨譯	現代英米詩選	定價一圓五十錢 送費八錢
西村陽吉著	歌集 第一の街	定價一圓九十錢 送費十錢



きかは便郵

東京市日本橋區檜物町九

紅玉堂書店行

一錢五厘
切手をは
つて下さい



愛 読 者 カ ー ド No.

御住所	
氏名	
書名	
この書籍をお求めになつた書店の名	

まことに御手数ですが上記各欄に御住所氏名を御記入の上御投函下さる様に御願いたします。このカードによりまして弊堂出版報告とその他の通知をいたしたう存じます。